

## 62 不思議なお灯明

伝承地：南大通り林松寺

参考書籍：24



(林松寺にある石生田家の墓)

今の小幡町あたりは、江戸時代侍屋敷と呼ばれており、たくさんの方々が生活していた。ここで紹介する物語りは、この侍屋敷に住む藩士と信心深いその妻とに降り掛かった不思議な話である。

江戸時代の終りごろ（文久年間）、宇都宮藩小幡町侍屋敷に石生田勝次とその妻タカが住んでいました。勝次は、金物方という役をつとめていました。

幼少のころから深く仏教を信仰していたタカは、毎朝、夫を送り出した後、仏壇に灯明をともし、静かに合掌し、夫が無事にお役目を果たしてもどることを祈っていました。この灯明は、夫が帰宅するまで消されることはありませんでした。

ところが、慶応4年（1868）12月のある日のこと、これまで赤々と輝いていた灯明が、風もないのに突然白い煙を出して消えてしまいました。夫の身に何事もなければよいが、タカは気が気ではありませんでした。

夕刻、無事に戻った夫を見て安心し、タカはこの日の出来事について一言も話しませんでした。ただ、夫の顔が心なしか青白くみえたのが、タカには気がかりでした。

それから2、3日が過ぎましたが、仏壇の灯明には何の変化もありませんでした。ところが7日目の午後のことです。タカが小用に立ち、戻ってくると、仏壇の中は真暗になっていました。夫の身を案じるタカは、急に胸騒ぎを覚えました。やはり夫の身に何かがあったのでは。やがて夕暮れ時となり、夫は何事もなく帰宅しました。夫の無事な姿を見て気を取り戻したタカは、思い切って今日あったこと、それから7日前にあったことについて話しました。

それを聞いた夫は、にわかに顔を曇らせ、

「何ッ、7日前にもそのようなことがあったのか、うん……、さては、あの日のことが……」とつぶやき、そのまま固く口を結んでしまいました。

それから11日目の午前中のこと。タカがふと顔をあげて仏壇に眼をやると、パッ、パッ、と灯明の炎が二度鮮やかな光を放ち、スーッと消えてしまいました。タカは、ぞっとして全身が凍るような気がしました。それでも大事な火を絶やしてはいけないと、再び灯明皿に新しい芯を入れて火をともしました。ところが、午後3時ごろ、こんどは灯明の炎が大きくゆれてパッと消えてしまいました。いよいよ、夫の身に何かあったにちがいない。タカは、祈るような気持ちで夫の帰りを待っていました。そして夕方になり、夫が戻って来ました。

タカは帰宅した夫の顔をみるなり、今日、昼間と昼過ぎとに灯明が二度も消えたことを話しました。この話を聞いて夫は、

「実はこの2月から御役替えとなり、処刑方にまわったのだが、先の2回といい、今日といいいずれもこの手で罪人の首をはねたのである。今日は、昼前に2人つづけて斬り、昼過ぎに1人斬った。確か、時刻も同じころである。まさか罪人の魂が、わが家の仏壇に現われるとは。不思議千万。」

と言い、これまで話を内緒にしていたことをタカに詫言いました。

夫から始めてその話を聞かされたタカは、

「人の怨霊というものは、恐ろしいものでございます。……それらの方々の供養に一心にお経を、お唱えして差し上げましょう。」

と言って、それから毎日、熱心に読経をつづけました。そして、その後は夫が罪人を斬首した日でも、灯明は消えなくなったということです。

石生田勝次は幕末における宇都宮藩の「据え物切りの達人」であり、また首斬りの名人とも言われた人物で明治14年4月22日に没し、妻タカは、明治10年11月19日に没した。その墓は共に林松寺にある。

